

小樽市

小松 悠哉

1. 概要

石狩湾に面し、古くから港湾都市として発展した。歴史的建造物が数多く、日本有数の観光都市としても人気が高い。大きな市ながら、きれいな海と山を兼ね備え、美しい自然と透明な空気に富んでいる場所でもある。

後志管内では唯一の市であり最も多くの人口を抱えるが、後志総合振興局は内陸の倶知安町に置かれている。保健所政令市の1つ。かつて最盛期の1960年代には人口は20万人前後をかぞえ、札幌市からJR快速列車で30分前後であることから、隣接する札幌市のベッドタウンとしての役割も持つ。しかし、人口は減少傾向にあり、現在では約13万人まで減少し、2010年4月1日に総務省から過疎地域として指定された。

小樽徽章は雪を表徴した六花の中に小樽の頭文字(小)を図案化したもので、1922年8月28日に制定された。

小樽市のシンボルとして、木はシラカバ、花はツツジ、鳥はアオバトとなっている。

1.1 地理

北海道西海岸のほぼ中央に位置し、海・山・坂など変化に富み、天然の良港を有する個性的なまちである。後志支庁北部、日本海沿岸の港町で、市域の南部は山地で、標高は高くないがところどころで海岸まで険しく迫る。市街が傾斜地まで展開しており、「坂の街」と呼ばれ、坂の代表的なものに船見坂(ふなみざか)や地獄坂がある。沿岸部を函館本線が走る。

1.2 気候

小樽市は北海道の割には寒暖の差が小さく、海洋性の気候であり、とんでもなく暑くなることもなく、それでいて猛烈に冷え込むこともない、比較的穏やかな気候に恵まれ、過ごしやすい気候となっている。

図1 小樽市旗



出典: Wikipedia

図2 小樽市の位置(1)



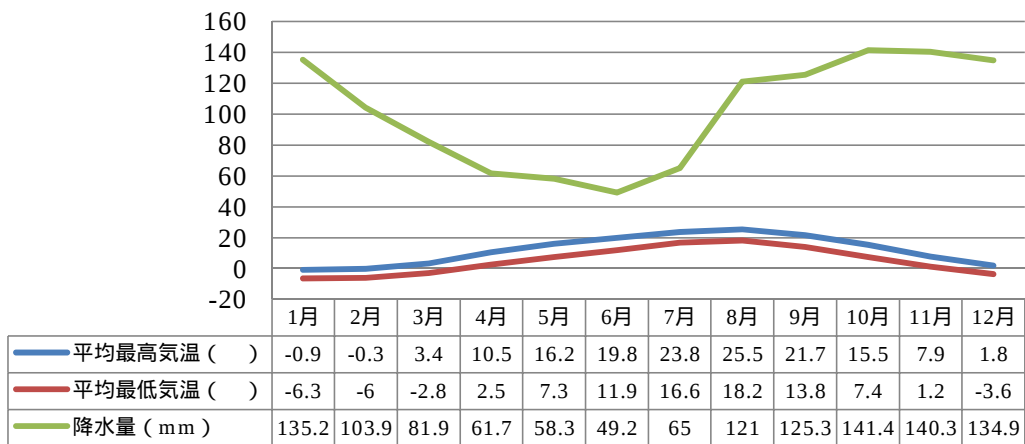
出典: Wikipedia

図3 小樽市の位置(2)



出典: Wikipedia

グラフ1 小樽市年間気温



出典：Zen Tech

表 1 小樽での過去の記録

項目	年月日	記録
過去最高気温	2000 年 8 月 1 日	34.9
過去最低気温	1954 年 1 月 24 日	-18.0
真夏日(最高気温 30 以上)	1999 年	16 日間
熱帯夜(最低気温 25 以上)	無し	
真冬日(最高気温 0 未満)	1945 年	96 日間
冬日(最低気温 0 未満)	1944 年	152 日間
年間降水量最多 1981 年	1981 年	1721.5mm
年間降水量最少	1984 年	751.0mm
年間降雪量最多	2000 年	792 cm

出典：Zen Tech

2. 歴史

「おたる」の地名はアイヌ語の「オタ・オル・ナイ」(砂浜の中の川)に由来する。しかしこれは現在の小樽市中心部を指したのではなく、現在の小樽市と札幌市の境界を流れる星置川の下流、小樽内川(現在の札幌市南区にある小樽内川とは別)を示していた。河口に松前藩によってオタルナイ場所が開かれたが、冬季に季節風をまともに受ける地勢ゆえに不便な点が多かったため、風を避けられ、船の係留に適当な西方のクッタルウシ(イタドリが生えるところ)

図 4 小樽内川



出典：goo ブログ

に移転した。しかしオタルナイ場所の呼称は引き続き用いられ、クツタルウシと呼ばれていた現在の小樽市中心部が、オタルナイ（小樽内、尾樽内、穂足内）と地名を変えることになる。現在の小樽市域にはこの他、於古発（オコバチ）川以西のタカシマ場所、塩谷以西のヲショロ場所も開かれていた。これら三場所は、後にそれぞれ小樽郡、高島郡、忍路郡となっている。また、これら三場所と渡島国や道外の間には北前船の航路も開かれていた。

20 世紀半ばまでは石狩地方で産出された石炭の道外への輸送や、ロシアとの交易で栄え、1920 年頃までは、札幌の人口よりも多く、函館に次ぎ道内第 2 位の人口であった。しかし 1960 年代以降、石炭需要の低下と北海道内の炭鉱の閉山、ロシア貿易の衰退、近隣の石狩湾新港の整備により港としての機能は衰え、人口も最盛期より 35% も減少している。

表 2 年表

西暦	出来事
1596 年	渡島福山の住人の八木勘右衛門が、オタルナイに入る。文献上最初の和人入植である。
1857 年-1861 年	箱館奉行の許可を得た小樽場所請負人恵比須屋半兵衛によって小樽-銭函間道路が開削される。
1865 年	幕府はオタルナイを村並とする。
1869 年	北海道後志国とともに小樽郡、高島郡、忍路郡が置かれる。
1880 年	手宮 - 札幌間に北海道最初の鉄道「幌内鉄道」（のちの手宮線・函館本線）が開通。
1899 年	区制施行（現在の区制とは異なり、当時の本州の市制よりも自治権の弱い体制である。）
1903 年	小樽 - 余市間に鉄道が開通する。現:小樽駅である小樽中央駅が開設する。
1914 年	第一期埋立事業（小樽運河）起工。
1922 年	市制施行、小樽市。
1940 年	高島町、朝里村を合併する。
1945 年	7 月 15 日に空襲を受ける。
1968 年	函館本線の小樽 - 滝川間が電化される。
1975 年	石狩町（現石狩市）の一部（石狩湾新港西部）を編入。
2010 年	道内の人口 10 万人以上の市で初めて、過疎地域の指定を受ける。

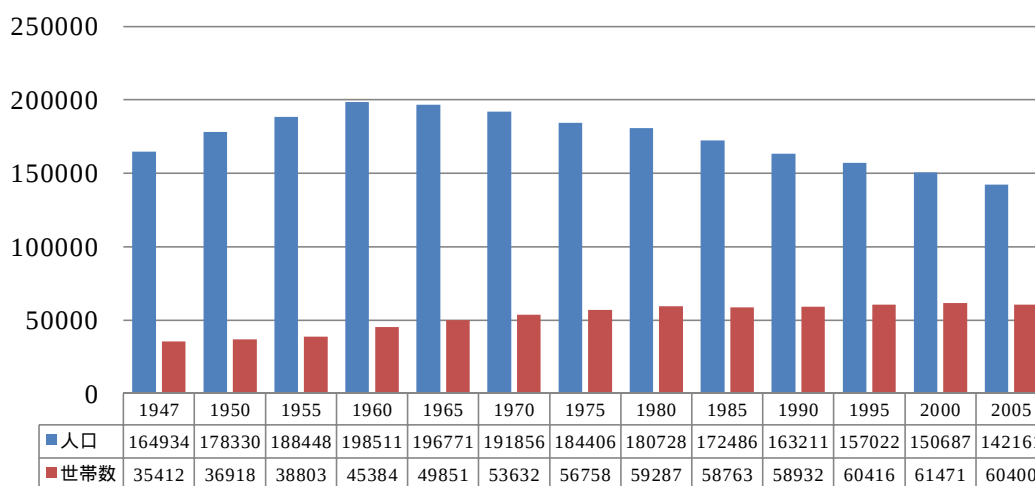
出典：Wikipedia

3. 人口・世帯数

先述の通り小樽市は近年、人口が減少傾向にあり、現在では過疎地域の使命を受けている。2010 年において、総人口 131,970[人]は全国ランキングで 209 位、北海道ランキングで 7 位となっている。また、人口密度は 542[人/km²]、昼夜間人口比は 100.86[%]である。

小樽市は幕府がオタルナイを村並とした 1865 年には人口、1,143 人と記録されている。そして 1920 年、第一回国勢調査で小樽区の人口 108,113 名で、札幌区の人口 102,580 名よりも多かった。この頃以前は、道央圏人口第一位であった。しかし 1925 年第二回国勢調査では、小樽区の人口 124,734 名で、札幌区の人口 145,060 名に追い抜かされてしまう。この頃以降、道央圏人口第一位の地位を、札幌に譲る。1958 年には塩谷村を合併し人口が 204,377 名となる。このころが、人口最大時であり、その後徐々に人口を減らす。そして 2010 年道内の人口 10 万人以上の市で初めて、過疎地域の指定を受ける。

グラフ2 人口推移・世帯数推移



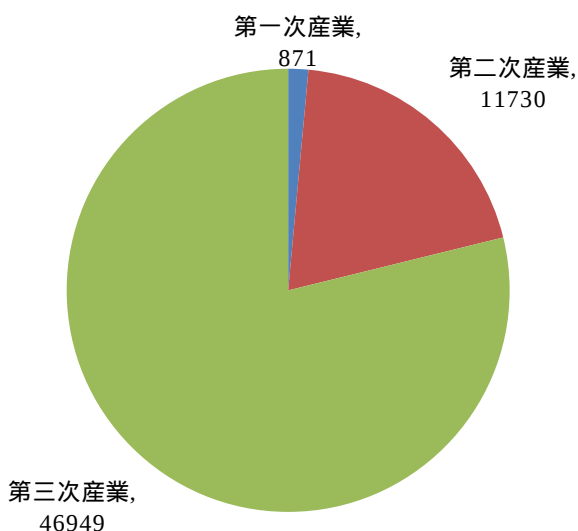
出典：国勢調査

4. 産業

小樽市は北海道開拓の玄関口として栄え、開拓の原動力となった歴史と伝統をもつまちで、漁業をはじめとする第一次産業、北国の厳しい寒さに耐える金属工業や、北海道産の原料を使った食品加工、漁業用の浮き玉作りから始まったガラス製造などの第二次産業、さらには北海道開拓時に本州との交易で培った商業、そして近年の観光地としての興隆。それらのすべてが小樽の現在の産業として息づいている。その割合についてはグラフ 3 の通り、第三次産業が圧倒的多数を占めている。近年、東アジアからの観光客が増加していることや台湾などで道産食品・水産加工品の人気定着しつつあることから、観光客誘致

をさらに推し進めるため、小樽の観光関連業者が、香港や台湾などの海外メディアや旅行代理店の担当者と意見交換会を開いたり、「小樽ブランド」の販路確立を目指し、現地バイヤーへの売り込みを図る商談会を開催するなど海外に向けた取組を進めている。

グラフ3 産業別人口(人)



出典：農林水産省 HP

小樽は、豊かな資源や伝統の技術を使った、ものづくりが盛んなまちである。菓子や水産加工品など、小樽市内で作られた製品は、本州のデパートの物産展などでも人気が高く、全国にファンが広がっている。

寒冷地である北海道には、数々の工業技術が蓄積されている。北海道で最初に開業した鉄道の機関車部品から始まった鋳物、凍らない給水栓、北洋漁業の缶詰、ゴム長靴など、北国ならではの工業製品が、たゆまぬ努力によりこの小樽から生まれている。

4.1 農業

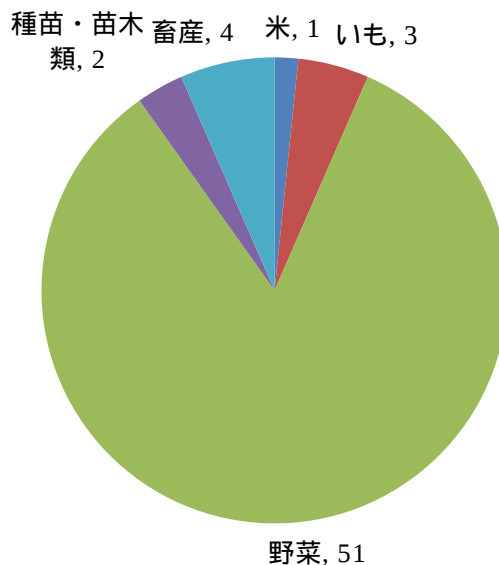
農業は傾斜地・狭小地を有効利用し、野菜・果樹を中心とした都市近郊型ハウス栽培が主体である。毎年8月下旬には市民体験農園で「収穫まつり」が開かれ、ジャガイモやトウキビ、スイカなどの農作物が市内中から持ち寄られるなど農業活動も活発なまちである。前述のような気候下ながら適地適作の農業地帯という特徴のもとに水稻、酪農、畑作、果樹（りんご、ぶどう等）を育てている。

図5 小樽スイカ



出典：asahi.com

グラフ 4 農業生産額(千万)



果実・花きの生産額は秘密保護上情報公開されていないため除く

出典：農林水産省 HP

北海道の澄んだ空気とおいしい水、肥沃な大地はたくさんの農産物を産み、さらにそれらの野菜や果物、牛乳を原料に数々の製品が生まれている。小樽の菓子技術で作られたスイーツ、道産の小麦粉を使った麺類などの製品は、国内外で高く評価されている。

4.2 水産業

小樽市は前述の通り北海道の日本海側中央部に位置し、68.62km(銭函～蘭島)の海岸線を有している。そして、海と山に囲まれた、豊かな自然環境が破壊されることなく残っているまちである。海岸の形状も、砂地海岸や岩礁地帯、転石海岸と変化に富んでおり、魚介類の種類も多く、小樽で漁獲される魚介類は約 40 種類で、2010 年の漁獲量は約 3 万 2 千トン、漁獲金額は 42 億円となっている。これらの水産物は、卸売市場で「せり」にかけられ、仲卸売業者を通して小売店に届けられる。

小樽市には、「小樽市公設水産地方卸売市場」と「小樽市漁業協同組合地方卸売市場」の 2 つの地方卸売市場があり、年間約 50 億円から 80 億円の取扱いとなっている。

また、小樽市の水産加工業(水産食品製造業)の製造品出荷額は、製造業全体の約 20% を占め、市の基幹的な産業となっている。

図 6 小樽水産物



出典：小樽ジャーナル

5. 観光業

図7 小樽市の風景

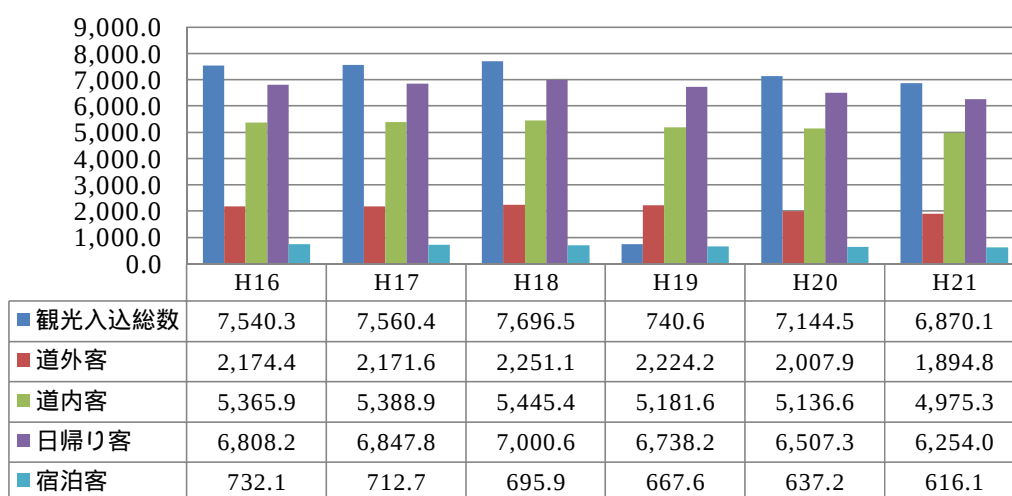


出典：Wikipedia

5.1 入込

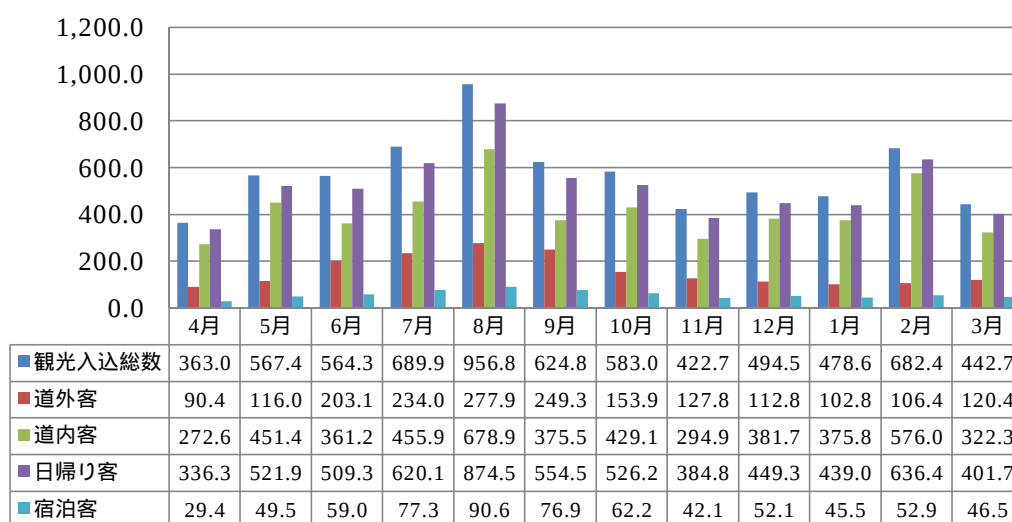
小樽市の産業は主に観光業で成っている。往時の繁栄をしのばせる近代建築が市街のいたるところで散見され、観光資源となっている。小樽運河は全国的に知名度が高い。また、かつて金融業で名前の知られていた町として今は資料館となっている旧日本銀行小樽支店にも多くの観光客が訪れる。

グラフ5 観光入込客数(千人)



出典：小樽市 HP

グラフ6 2009年度月別観光入込数(千人)



出典：小樽市 HP

5.2 観光名所

5.2.1 小樽運河

内陸に水路を掘ったものではなく、沖合を埋立て、陸との間に出来た水路であり、「埋立て式運河」と呼ばれる。海上に停泊した船舶からの貨物を乗せた舢舨（はしけ）舟を係留し、貨物の荷揚げに使われた。人力で荷揚げする方式は戦後に入り衰退していった。また、戦後は樺太等との交易がなくなったため、物流の拠点としても急速に廃れていった。

無用の長物と化し、放置されていた小樽運河はヘドロがたまり悪臭が漂うようになった。1960年代に入り、運河を埋め立てて、道路として整備する方針が小樽市から打ち出された。それに対し運河の保存運動が全国規模で高まった。市側は当初の全面埋め立てに対し、運河の半分の幅を残す妥協案を提示するが、全面保存を求める保存派と意見が折り合わないまま、1983年には埋め立て工事に着手。1986年には北海道道 17 号小樽港線（通称：小樽臨港線）が開通する。散策路やガス灯が整備され、大きく様変わりした運河周辺は、小樽の一大観光スポットに成長し、1996年には都市景観 100 選を受賞した。

現在では、立地の関係からか、当初の景色を残す北運河よりも、半分を埋め立てて散策路を整備した臨港線部分に観光客が多い。運河の兩岸には煉瓦や札幌軟石で造られた重厚な倉庫群が立ち並び、往時をしのぶことができる。

また、小樽運河北部には小樽運河公園があり大正時代の軟石造りの倉庫を復元した休憩棟や遊具施設棟などが設けられ、観光客が足を休める場ともなっている。広さは約 7800 平方メートルで、かつての日本郵船の船入潤であった場所に作られた公園。

図 8 小樽運河



出典：Yahoo!ブログ

図 9 ガス灯



出典：北海道無料
写真素材 HP

5.2.2 小樽天狗山

市内から車で 15 分の場所に位置する、小樽のシンボリックな山。眼下には市街が開けていて小樽港や石狩湾が見え、パノラマで小樽を見ることができる。晴れた日には遠く暑寒別連峰に積丹半島が一望できる。ここから眺める夜景が宝石のように見える、と観光客に人気である。

また小樽天狗山には山麓と山頂のレストハウスを約 4 分で移動できる小樽天狗山ロープウェイがあり、春は山菜採り、夏はハイキング、冬はスキーと四季を通じて楽しめる。山頂には 4 つの展望台がある。

5.2.3 小樽水族館

大自然に囲まれた国定公園内にある水族館。本館には 360 トンの海水が使われる大型の

回遊水槽を中心に、約 300 種 2 万点が展示されている。トドのショーやイルカとオタリアのショーが人気で連日開催されているほか、イルカふれあいプールでは日本で唯一ネズミイルカを展示しているなど見所は満載。体の模様が豹にそっくりのヒョウモンオトメエイを道内初展示もしている。2 階の海コーナーには風・波・生物の水槽がある。館内にはレストラン、売店もあり、お土産品も充実している。また、隣接の遊園地マリナランドでは地上 34m の大観覧車などの乗り物もあり、「小樽といたらここ！」というスポットである。

図 10 小樽水族館



出典：FC2 ブログ

5.2.4 長橋なえぼ公園（森の自然館）

道内で最も古い森林公園として開設され昔の苗畑として植樹されたものが、現在森林として残され国内外の樹種の見本林があり道内では特殊な地域となっている。またエゾヤマザクラの名所としてもよく知られている。ミズバショウの湿地、ザゼンソウの群生地、カタクリの群生地。面積 31.1ha。森の自然館は入園自由で自然観察の為の学習室や図書コーナーがありゆっくりとした空間で自然を学び、満喫することができる。桜の名所として地元では有名。お花見を楽しめる観光スポット。

5.2.5 旧日本銀行 小樽支店（金融資料館）

小樽に 1893 年初めて開設された日本銀行の派出所。その後出張所を経て小樽支店に昇格となり、2002 年 9 月に営業を廃止するまで地方経済の発展に重要な役割を果たした。現在の建物は、1909 年 7 月に着工し、1912 年 7 月に完成したもので、石造り風の外観は、レンガ造りの壁にモルタルを塗ったもので銅葺きの屋根とともに銀行建築にふさわしい重式建築の先駆者である辰野金吾の名も記録されている。2003 年 5 月より、金融資料館として公開されている。1 億円を持てる体験ができる。

5.2.6 鯨番屋

第二次世界大戦前、とりわけ大戦景気までの時期に、北海道の日本海沿岸で隆盛を極めたニシン漁で財を成した網元達が、競って造った木造建築物。「鯨御殿」の定義は未だ不詳であり、大戦景気頃までにかけて建築された網元の家屋程度の目安で、「鯨御殿」として紹介されている。かつてニシン場の古老達は、上座敷には違い棚、床柱には黒檀を使用していることが条件のように話していたが、その定義に合致するものはごく少数であり、ほとんどの建築物は現在解体されている。また、必ずしも望楼を備えているとも限定できない。様式は古くは平屋形式であり、屋根は瓦葺きである。

御殿と称されたのは、内部に本州から移入された檜や木目の美しいケヤキ・タモ材などを使用し、廊下等には生漆を施し、欄間を備えた建築物であることによる。また、厳密に

は番屋とニシン御殿は異なる建造物であり、資金や建築面積の関係から、中には折衷型の物もある。本来は同じ敷地内に、主人家族と女中などの奉公人のみ居住する建物である。ヤン衆とは季節雇用の労働者であり、主人家族とは別棟に住むのが通常であった。

5.2.7 流水凍れ館

マイナス 15 度前後に保たれた氷の世界を体験できる。館内には 18m ほどの氷の滑り台や氷のベッド、氷の水族館などがあり、売店も併設している。夏に人気の観光スポットである。

5.2.8 北ーヴェネツィア美術館

故ダイアナ妃が実際に乗ったゴンドラや色鮮やかなヴェネツィアン・ガラスを展示している。ヴェネツィア製ドレスを着て記念撮影もできる。1 階エントランスフロアには、ゴンドラが浮かぶ室内プールとミュージアムショップがある。2・3・5 階の展示室はヴェネツィアの文化的な成熟期である 18 世紀頃の宮殿の部屋を再現していて、四季ごとの貴族の優雅な生活様式や、様々なヴェネツィアガラスの作品を紹介している。ヴェネツィアに現存する宮殿がモデルとなっている観光スポット。

5.2.9 小樽海上観光船

小樽をノスタルジックに楽しむ観光船。おたる水族館や鯨御殿などがある祝津への航路と断崖絶壁の景色が素晴らしいオタモイ周遊の航路がある。屋形船による港内遊覧もある。

5.2.10 小樽オルゴール堂 2 号館 アンティークミュージアム

世界中のアンティーク・オルゴールが展示されている。からくり人形、自動演奏ピアノなど、さまざまな種類のオルゴールが並ぶ。また、1 日 6 回、オルゴール・コンサートが開かれる。

5.2.11 その他

小樽には他にも奇岩や絶壁など勇壮な海岸線をフェリーや遊覧船から見る事が出来るオタモイ海岸や、幼少期を小樽で過ごした永遠のスーパースター石原裕次郎の記念館、「北のウォール街」として世界の相場に影響を与えた、色内地区に当時のまま保存されている銀行建築物など観光スポットが目白押しである。

5.3 名産品

5.3.1 水産加工品

四方を海に囲まれた北海道は海産物の宝庫。そんな中でも古く

図 11 小樽寿司



出展：Yahoo! ブログ

から漁業が盛んだった小樽には、加工技術の蓄積により、新鮮な魚介類を使った水産加工品がたくさんある。国内外の品評会で受賞する製品も多く、小樽の水産会社のレベルの高さを実証している。市内にはすし店も数多くあり、小樽観光で訪れた人々を魅了している。

5.3.2 ガラス工芸・クラフト

吹きガラスやバーナーワーク、カットガラス（小樽切子）、ガラスと漆を組み合わせた装飾品など、ガラス加工技術と日本の伝統技術を融合させたデザイン性の高いガラス工芸品は国内外で好評を得ている。また、オルゴール、木工、染織など手づくりの製品も数多くあり、全国から注目されている。

北一硝子

1901年に創業した浅原硝子が前身。当初は石油ランプの製造を行っていたが、当時活況を呈していたニシン漁用浮玉（ブイ）の製造も手がけ、飛躍的に業績を伸ばした。プラスチックなどによる代替品の開発や漁業の衰退が進んだ1980年代には斜陽化が進んだが、小樽運河地区の再開発に伴い開設した観光客向けの常設ギャラリーが人気を博し、照明製造販売からガラス器の販売業への業態転換に成功した。当初からの国内外のガラスメーカー・商社商品の仕入れ販売に加えて、現在では自ら企画する商品や傘下の工場の運営のほか、レストランやカフェ、また日本酒やワイン等の酒類販売も手がけ、小樽市内だけでも10店舗以上の直営店を構える。この成功は、後に全国各地に出現した観光地型のガラスショップ・工芸館の先駆けとなった。

図 12 北一硝子ランプ館



出典：COLOR FIRTER

5.3.3 飲料

小樽は水のおいしいまちとしても有名であり天狗山の伏流水を使った日本酒の工場をはじめ、ブドウ畑が広がる毛無山中腹のワイン工場、市内に点在する地ビール工場など、お酒の宝庫と言っても過言ではない。また、近年は小樽の水のペットボトルも販売され話題になっている。

< 参照ホームページ >

- ・ Wikipedia：<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B0%8F%E6%A8%BD%E5%B8%82>
- ・ わがマチ、わがムラ：<http://www.machimura.maff.go.jp/machi/>
- ・ 小樽市ホームページ：<http://www.city.otaru.hokkaido.jp/>
- ・ 北海道庁ホームページ：<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/index.htm>
- ・ 朝日新聞ホームページ：<http://www.asahi.com/>

- Yahoo! ブログ : <http://blogs.yahoo.co.jp/wine100per/25302992.html>
- 旅行のとも ZenTech : <http://www2m.biglobe.ne.jp/%257EZenTech/index.htm>
- Do map : <http://hokkaido-map.com/>
- 樽樽源 : <http://www.public-otaru.info/index.html>
- Goo ブログ : <http://blog.goo.ne.jp/efu2655f/e/674968f8fed085dbe3e5bd6fcd5aa723>
- FC2 ブログ : http://cxmoon.gooside.com/04_animal/htm/e03.htm
- 北海道文化資源データベース :
<http://www.pref.hokkaido.jp/kseikatu/ks-bsbsk/bunkashigen/parts/1000028.html>
- COLOR FIRTER : <http://colorfilter.blog89.fc2.com/>
- asahi.com : <http://www.asahi.com/food/news/TKY200907260142.html>
- 小樽ジャーナル : <http://otaru-journal.com/2006/11/post-1489.php>
- 北ーヴェネツィア美術館ホームページ : <http://www.venezia-museum.or.jp/index.html>
- MAPPLE 観光ガイド : <http://www.mapple.net/>
- 郵便番号検索 : <http://www.jplocal.com/ujiturn/01203.html>